

庭をつくる・協働(コラボレーション)

現場をおさめる技術は、さまざまな経験や試行錯誤によって導き出された法則性や論拠を土台にしている。この、現場で磨かれた技術(職能)と協働することは、より良いものをつくるときの必需品である。特に他業種多職能で構成される庭園の施工現場で、しかも庭園に求められるさまざまな現代機能や



現場指揮を取る中川正男氏

大木の移植には、季節の違いや樹勢、根の状態や現場状況など事細かに見極めて判断する豊かな経験と技術が必要である

設計者の感性を十分に満たすためには、以前にも増してより多くの職能参加が必要となる。

本工事では、造園のほか門塀、水道、電気、門扉、土工それぞれに経験豊かな職能参加があった。中磯園・中川正男氏もその人であり、中川氏が持つ移植技術に造園の多くを支えられた。

中川氏は地元佐渡在住の庭師であり、独学で庭造りを学んだ人である。本工事では樹木の扱いに豊かな経験を発揮されたが、特に大木の移植技術(移植時期・手順・植付け方法)には目を見張るものがあった。庭園内に移植された巨大カヤをはじめ、タブノキ、ヤマモミジ、ヤマボウシなど多くの大木は、そのほとんどが中川氏の技術によって運び込まれ定植されたものである。



大型重機で植栽地を締め固めると、移植後に樹木の生長が著しく阻害されるこれを回避するため、樹木植栽を工事初期に行うなど植栽地の踏圧防止を行った

国際交流と庭づくり

以前から日本庭園は海外で高い評価を受けている。扱う材料が質素・不完全であるにもかかわらず、それらを使って設える空間構成の巧みさとその質の高さは特に評価が高い。

ところで、本庭園築造中に海外研修生を受け入れる機会があり、短い期間ではあったが、庭園内で直接実指導ができた。研修生はドイツ・ライプチヒ出身の女性造園家で、ドイツの大学で日本庭園を専攻した人である。

実技作業は樹木の剪定、植付け、飛び石据付け、掃除などの基礎項目であった。実作業を通して机上(計画)と現場(技術)の距離を少しでも埋めることができたことであろう。研修生にとって短期間でも慣れない作業であったと思うが、この経験を生かして、是非とも自国で本格的な日本庭園をつくってもらいたい。そして、それらの日本庭園を通して国際文化交流の一翼を担ってくれたら大変意義深いものとなる。



海外研修生

樹木の扱いや剪定、スリング(ロープ)のかけ方などを学ぶ